



年 頭 に あ た っ て

藤 谷 超

明けましておめでとうございます。

12月としては記録的といわれる大雪のあとに迎えた新年となり、とくに北陸以北の地域ではご苦労の多い新春であったかと存じます。

昨年日本海の水産は低迷の内に推移してしまいましたが、今年こそは良い年になりますように期待しております。それには、試験研究の成果に依存するところが大きいことは異論のないところですが、今年は私共のプロジェクト研究の多くが締めくくりに段階に入ります。

マリンランシングについては、愈々実証研究の段階に海洋生産力の研究も第Ⅱ期の最終年となり、一方昨年から開始された管理型漁業の研究は今年から本格的な研究へと進展することになります。いずれのプロジェクトについても、関係県のご協力を得なければ発展が期待できませんので、本年もよろしくお願いいたします。

ここ数年来、さまざまな分野で、いわゆるハイテクノロジーの活用が展開されています。水産の分野においても、その重要性はかねてから強調されておりましたが、今年水産庁にハイテクノロジー開発室が設置されることになり、高度技術社会への仲間入りが実現することになりました。人工衛星を中軸としたリモートセンシング技術の活用による環境条件の把握、あるいはバイオテクノロジーを中心とした生産性の向上など、その成果の活用には大きな期待が集っております。したがって、日本

海の水産研究においても、このような新しい時代に対応し得るような体制が必要となりましょう。

国の財政事情は今年も一段と厳しい状況に置かれています。今年も研究者の英知を結集して日本海の水産業の発展に寄与したいものと念じております。

(ふじや まさる 日本海区水産研究所長)

田名部 政 春

明けましておめでとうございます。

昭和60年の年頭にあたり、皆様のご活躍を心からお祈り申し上げます。

さて、昭和還暦でもある60年は水産にとってどういう年になるでしょうか。日本海中部地震、異常低温現象と2年続きの異変があったので、今年は明るい話題を期待したいものです。

昨今のきびし過ぎる漁業情勢のなか、当面している諸問題の解決には技術の革新や科学的知見の蓄積と活用が不可欠とされております。

本県では昨年、県水産技術会議を設置して、試験研究の効率的かつ適切な推進について鋭意協議を重ね、旧臘試験研究推進構想を樹てたところであります。そのなかの重点課題の一つに漁業情報利用開発試験があがっております。

国レベルのこの種の事業については、漁業情報サービスセンターが水産庁の委託を受けて実施しており、60年

度には漁場形成予測システム開発事業や漁業情報利用システム開発事業をさらに充実強化しセミ事業化が計画されているようですが、小ぢんまりとした現状維持の対応では自ら限界があるのではないだろうか。多くのご意見もありましょうが、識者のご提言を尊重し勇断をもって実効が期待できる方策の樹立を願っております。

今後の漁業はその資源の飛躍的増大は期待できそうにもないので、依然として低位生産性からの脱却は難しいものと思われまふ。このように漁船漁業に明るい見通しが乏しく、低調であればある程省エネに徹した漁業経営のあり方が必要であり、そのために適切な情報を迅速に提供することが肝要であると思われまふ。

このような業界の要望に応えられる体制づくりが何よりも急がれる時ではないでしょうか。

60年の年頭にあたり、この事業の飛躍的な発展を念じつつ初夢を正夢としたいものです。

(たなぶ まさはる 青森県水産試験場長)

### 伊 藤 進

謹んで初春のお慶びを申し上げます。今年もまた何分ともよろしく願い申し上げます。

昨年は春先の異常低温に始まり夏の高温に痛められ、只でさえ少なかったアワビ、サザエ資源が更に減少し、その影響は今後長く尾を引くものと心配されております。大巾な種苗放流が求められているにも拘らず、その対応策がまだ樹っておりません。

マイナスシーリングの中で苦しい予算編成を進めておりますが、大きな期待はむずかしく、またしても弱い頭で勝負をしなければならぬかと思っております。

当ブロックの提案でサザエの特定研究が話題となっておりますが、その成立が大いに期待される所です。また予算は別としても、協同研究か、それに近い体制をつくって戴けないかと考えております。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(いとう すずむ 青森県水産増殖センター所長)

### 時 田 綸

謹んで新春のお喜びを申し上げます。

各位にはますます御清栄にて、よいお年をお迎えることと心からお喜び申し上げます。

昭和59年の年頭のあいさつの中で申し上げましたとおり、昨年の本県のハタハタ漁業は底曳漁業、定置網漁業ともに史上最低の漁獲量となりましたことは、皆様よくご承知のことと思ひます。

本年中には、懸案の水産振興センター（仮称）の本館も完成する運びとなりました。これを機会に職員一同懸命の努力を続けハタハタが北海道のニシンの二の舞にならないよう頑張る所存でありますが、ご承知のようにハタハタは、日本海ブロックの各県と多大な関係のある魚種である関係上、日本海ブロックの各県水試のご協力、ご指導なくしては、その資源の維持増大は不可能な状況下でございます。

日本海区水産研究所のご指導は勿論のこと、日本海関係水試のご協力を切に希望するものでございます。

なお水産庁ならびに各県水産行政担当機関にもいろいろとご協力をお願いすることとなると思ひますが、試験研究機関の皆様からも、この秋田県の苦衷をお察しのうえ、よろしくご伝声のほどお願い申し上げます。

年頭のあいさつならぬ、年頭のお願ひとなりましたがよろしくお願ひいたします。

(ときた りんいち 秋田県水産試験場長)

### 村 岡 勝

明けましておめでとうございます。

今年は、昭和60年代の最初の年に当ります。

年頭にあたり、50年代の漁業環境をふり返って見ますと、石油ショックによる後遺症の持続と、200カイリ時代の到来という、2つの大きな波にさらされました。この中において本県は魚種の交代期にあたり、ハタハタ資源の枯渇を筆頭に、どれを見ても漁業にとっては、厳しい10年だったと思っております。

一方、このような状況に対応するために、財政事情の厳

しい折にもかかわらず、栽培漁業センターを始めとして、試験船の建造、さらには水産振興センター建設事業並びに種苗生産増強施設整備事業の着手と研究機関の充実を図るための、設備投資や多種多様な調査、研究も積極的に行われた年代でもあります。

60年代はこれ等を十分に認識し、50年代に蓄積された知見や施設を活用し、また他産業で開発された技術をも積極的に取り入れ、漁業者、行政そして一般社会の要望に十分に答えられる研究機関にすべき年代と考えますが本年はその初年度ということで、職員一同心を新たにしてお祈りする所存でありますので、今後とも関係各位の御指導、御協力をお願いし、新年のごあいさつに変えさせていただきます。

(むらおか まさる 秋田県栽培漁業センター所長)

### 加藤 浩

謹んで新春の御祝詞を申し上げ、皆さまの御多幸をお祈りいたします。

気象庁の予報によれば、今冬は暖冬傾向とのことであるが、日本海側の年末からの寒波と降雪をみると大雪が懸念されそうである。せめても昨冬のように日本海の漁海況に影響を及ぼすような強烈な寒波の襲来だけは勘弁願ひ、穏やかな年であってほしい。

日本海北部における漁業は沖合・沿岸ともに相変わらず不振状態から脱却出来ずにいる。しからば、研究機関はどう対応すべきかと問われても特効薬などある訳がないから窮してしまう。

ただ将来漁業経営の安定化をはかるためには資源の適正な管理手法の確立こそ究極の目的ではないかと思う。言うに易し行は難しである。しかし停滞は許されない。それぞれの分野で新しい感覚と独創性に富んだ研究が推進され、それらの成果が集約されて結実することを期待したいのである。終りに水産研究の進展充実と水産業の発展を祈念いたします。

(かとう ひろし 山形県水産試験場長)

### 土屋 保

明けまして、おめでとうございます。

皆様にはますますご健勝で、新しい年をむかえられたこと、心からお慶び申し上げます。

昨年8月1日付で水試に戻りました。本誌をお借りして皆様に格別のご指導をお願いいたします。

昨年は20年以上に一度しかないという異常低水温現象にみまわれたこともあって、本県の水産には明るい話題がなく推移いたしました。

今年は良い年でありたいと祈念しております。

思えば、資源管理型漁業といわれて久しくなりますが、この仕事がよくやく産声を上げ、私共も日水研の指導によりまして、いくつかの問題を整理して、なんとか軌道を初心者マークをつけて走れる体制になりました。今年が正念場と考えております。幸いなことに今は極一部ではありますが、漁業者自らが現状の反省から資源管理に通ずる芽生えもありますので、この芽を大事に育てたいものだと考えております。

それにしても昨今の試験研究は種々な意味で大変忙しくなっております。せめて心のゆとりだけは持って進めたいと年頭に当たって考えた次第です。

皆様と共に今年も頑張りたいと思っています。何卒よろしくお願いいたします。

(つちや たもつ 新潟県水産試験場長)

### 岡田 稔

新年お目でございます。昨年春の異常寒冷水をめぐる様々な波紋は県内漁業にも大きな影響を与えました。私共栽培漁業センターにかかわる業務にも単に種苗生産開始時期が1ヶ月遅れただけでなく、その後の表層水高温化など初体験の現象も重なり、放流・調査のタイミングをはじめ計画達成に困難な年でした。

獲る側の漁業ばかりでなく、安定した技術がありそうな種苗づくりの部門でさえ、自然の息吹きの僅かな変化に左右される生き物を扱う一次産業のむずかしさを再認識した次第です。

とはいえ、放流に関する資料は市場調査などの強化により年々蓄積がすすみ、業務のPRがし易くなってきており、人類規模の実験の一つでもある栽培漁業の推進に役立った年であったように思います。

これから迎える新年も同様、皆様の御指導を得ながら邁進したいと存じます。

(おかだ みのる 新潟県栽培漁業センター所長)

### 浜谷 辰 為

明けましてお日出とう御座います。

希望に満ちた新春を迎えるに当り、皆様の御繁栄と御多幸を、心からお祈り申し上げます。

1980年代も半ばとなり、21世紀へ余す処15年となりました。

産業の歴史を振り返って見ますと、第1次産業革命は、物質文明の開化であり、これを制御する上で、特に機械の時代であり、今世紀の第2次産業革命は、電気、化学、石油等複数では有りますが、エネルギーの時代ではなかったかと思われます。

現今の技術革新の急速な進歩は、高度情報化の波となって押し寄せ、人間の能力の一部を機械に置き換え得る様になり、近い将来においては、人の精神活動の領域でも、機械の代替が可能になる事も夢ではなく、21世紀は将に情報革命の時代と云われております。

水産の分野においても、例外ではありません。漁業振興の第一は、先づ、水産資源の有効利用を計る事であり資源の状態を適格に、かつ早期に診断し、それに基づいて、適正な資源管理や資源の増強を行っていかねばなりません。

此のためには、生物の生理、生態を直接把握する事は勿論、これに関連する生物学的な情報や、漁獲統計情報の必要な事は、論を待たない処であります。水産生物が、海洋を生息の場としている以上、海洋の物理的、化学的な環境情報が必要となって来ます。船舶による海洋観測は、基本では有りますが、得られる情報が、広大な海洋においては、点として断片的に得られるに過ぎません。

近年、人工衛星や航空機を利用して、海面や表層水の情報グローバルに総観的に観測するリモートセンシング技術が、急速に進歩して来ており、又、これに併行して、海中、海底の情報収集のため、音響を利用した各種の計測技術が開発されて来ております。これにより、海洋の表層の現象は、人工衛星の各種のセンサーで捕え、海面下の現象は、音響センサーで捕える事が可能になって来つつあります。

此の様に、情報収集技術は、急速に進歩しつつありますので、試験研究にたずさわる者は時代の趨勢に取り残されない様、旺盛な研究心と不断の努力が肝要と云えましょう。

年頭に当り、いささか申し述べまして、新年の御挨拶と致します。

(はまたに ときよし 富山県水産試験場長)

### 荻野 昭

明けましておめでとうございませう。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

昨年は冬の異常低水温、また夏は異常高水温ということで栽培漁業関係ばかりでなく、日本海の漁業全般に、とくに低水温では大きな影響を及ぼし、各県その対策等に大変な年であったと思います。当センターでも低水温、高水温とも両ピンタを喰ひ稚魚、親魚とも被害を受け自然界の変動の厳しさをいやという程知らされました。今年はそのような異常現象の起きないことを祈るばかりです。

さて200海里以来漁業情勢の逼迫、沿岸漁業の見直し、栽培漁業の振興と施策は推進されて来まして、当センターもその一翼を担い、種苗の量産、放流に努力を続けてきましたが、期待される効果となると底着性のものに若干それらしいものが見られるものの、ひれものとなると資源変動の影響なのか殆んど感じられない。種苗、放流技術にまだまだ問題はあるとはいえ、それにしても無造作な幼稚魚の漁獲や密漁(貝類)など栽培の足をひっぱる問題が大きくないだろうか。これらの問題の解決なしではどれだけ放流量を増やす努力をしても期待出来そう

にないと感じられてならない。どうしたらよいか、さらに市広い漁業者の参加を呼びかけ説得、話し合いの努力をする必要があるのではないだろうか。

(おぎの あきら 富山県栽培漁業センター所長)

町 中 茂

明けましておめでとうございます。

今年は、昭和60年代の幕明けとなるわけですが、水産業においては、資源問題を始め、さまざまな情勢から厳しい年になることが予測されよう。従来のように漁獲努力の増強によって漁業経営が支えられてきた時代から、いまは、経営の合理化、さらには魚族資源の有効利用、つまり管理型漁業への確立を急がなければ漁業経営の不振は依然として解消されることなく、その深刻化はさらに厳しさを増すものと思われる。

近年の栽培漁業の推進は、かなりの技術レベルで展開されているとは言うものの、自然界（海）における人為的涵養は厳しく、種苗放流等によって資源をコントロールするには、まだまだ問題も多く息のながい仕事になりそうである。

いずれにしても、海洋の潜在的生産力によって生産されている魚族資源を大切に利用することこそが今後の漁業経営の安定につながることは、ここに言及するまでもなく、誰もが思っていることであろう。

以上のことをふまえ、前浜漁場において行なわれている漁業の実態をみるに、さまざまな漁業がそれぞれの規模と投資によって行なわれ、資源状態が厳しいという条件のなかで、生き残るための過当競争は一段と激しさを増し、それが経営の圧迫につながっているものと思われる。

これを打開することは、きわめて難しいことではあるが、漁業者自らの努力はもとより、関係機関の強力な指導が必要であろう。具体的には、漁獲量の増大のみに依存することなく、資源の維持管理を前提とし、過当競争の排除による経費の節減、漁場の計画的利用と資源の有効利用を含め歩留りのよい漁業への質的転換の展開に結びつけることこそ、当面の大きな課題であると念じている次第です。（まちなか しげる 石川県水産試験場長）

大 山 岩 雄

明けましておめでとうございます。

昨年は豪雪に明け、異常冷水、夏期の高水温、年末には一転して大雪、その上台風の上陸なしというかつてない異常気象となりました。特に本県の漁業生産量の約3分の1を占める定置網は上期の異常冷水、下期の高水温により大きな影響を受けております。今後この影響が水産資源にどのようにひびいてくるのか、今年最大の関心事となりました。比較的研究の進んでいる農業の分野でさえ、農作物の豊凶が自然現象に左右されなかった年はないと云われています。まして、水産においては、それ以上に影響が大きかったことを昨年は思い知らされた年であり、漁業が自然現象に対し、少しでも対応出来るような生産構造になるよう努力しなければならないと痛感した年でもありました。

それはそれとして、昨年沖合の漁場利用について、業界サイドで自主的な会合が持たれたと聞いております。また漁場資源管理協議会を設置し、推進していこうという動きも出ております。当面は沖合漁場の合理的利用に重点が置かれているようです。一方七尾湾のアカガイのように底着性地先型資源の一部については曲りなりにも漁業者自身による漁場管理が行われ、それなりに効果をあげている地区もあります。徐々にではありますが栽培漁業について、漁民の意識向上がみられることは我々にとって非常に励みとなっています。このように業界が自主的に漁場管理を行うという動きに対し、試験研究機関として、今後どの様に対応していくか今年の検討課題となりそうです。

いずれにしても、いつの日か栽培漁業が定着し、漁業が資源培養管理型漁業に脱皮出来れば不測の事態にも対応可能な産業として、生れ変ってくるのではないかと、夢のようなことを考えながら今年も頑張っていきたいと思っています。

(おおやま いわお 石川県増殖試験場長)

村 裕

煙草の害については既に識者の間で語りつくされた感

があり、仁術家もまたさかんに禁煙を推奨なさる。最近では嫌煙権とやらが幅をきかせてきたため、乗物はみな禁煙車、禁煙席、会議でも禁煙がまかり通るようになって、世の愛煙家はその生命線を死守するのに四苦八苦の体である。しかし、これだけ煙草の弊害がさげばれながら尚かつ宣伝につとめなければならないのは、将来の日本たばこ産業株式会社を見越しての商魂のたくましさゆえであろうか。“今日も元気だ、たばこがうまい”という専売公社のCMで、“が”の濁点を消した知恵者がいるそうなの。しかもこれは見事にきまっております、最近の嫌煙風潮にびったりの、Parody の傑作といえよう。煙草の害が気がかりなら“たばこ買まい”に徹するべきである。

そんなに長生きするつもりはないが、少くとも生きていく間はできるだけ健康でありたいと願い、更に最近の嫌煙運動に対する喫煙派の抵抗も先がみえてきたことだし、それに文字通り煙草銭かせぎにもなるというので、昭和の還暦を機として禁煙派へ転向することにした。少しは頭もすっきりして、ましな仕事ができるのではないかといい淡い期待もこめられている。という次第で苦しいスタートですが、今年もせいぜい努力するつもりです。皆さんの御健闘をお祈りします。

(むら ひろし 福井県水産試験場長)

石田 信一

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。

昨春は水温の上昇が遅く、種苗生産業務に支障を来すのでは、と心配しましたが、マダイは例年より10日程の遅れで産卵を始め、クロダイ、クルマエビも順調な経過をたどり、当初の危惧をよそに、目標数量を上回る結果を得ることができました。

初めての職場であり、珍らしさもあって、業務に励む所員の邪摩にならない程度に現場へ出て、室温40℃を超える飼育棟内での諸作業や、大量の餌作り、炎天下での給餌や標識付け等を体験してみました。

この体験を通じて実感したことは、まず、過酷な職場

環境の改善や、諸作業の省力化を進めなければ、現在以上に種苗大量生産技術を向上させることは、難しいのではないかということ。つぎに、生産目標数が、無形の圧力となって、職場全体を支配し過ぎているのでは、ということでした。

職場環境の改善や省力化の促進は、現今の財政状況では、容易ではないと予想されますが、関係当局の理解を求めれば解決できるものと考えています。

問題は、生産目標数量達成という、無形の圧力からの解放です。種苗を大量生産し、栽培漁業の発展を目的とする事業所ですから、生産目標数量が定められ、目標を達成するのが業務であることは当然ですが、それを無形の圧力と感じない雰囲気職場にできないものかと、無い智恵を絞ったりしています。

例えば、到達目標を、ふ化した幼生全部が、放流サイズに成長する種苗生産技術開発に置き、そのための試験を繰り返しているうちに、目標数量が生産できていたという状況は作り出せないものでしょうか。

ふ化した幼生が全部育つということは、夢みたいなことですが、この初夢が雲散霧消しないよう努力しようと思っております。よろしく御指導下さるよう、お願い致します。

(いしだ しんいち 福井県栽培漁業センター所長)

塩川 司

あけましておめでとうございます。

年の始めに当り、一個人として、また組織の一員として将来に向けてどのように対処していくべきかを考えてみたい。

まず、個人としてどう対応するか。近頃アイデンティティの確立という言葉をよく耳にする。これは自我の確立ということであり、自分の考えをしっかりと持とうということである。成年になって自分の人生の指針を自分で選ぶことが出来ないようでは情けない。「将来こういうことをやりたいために、今、これこれをやっているのだ」と断言出来るような人でなければならないと思うがどうであろうか。

自我を確立し、未来の夢が確実な人間ほど素晴らしいものはない。着実に将来を自分の方に手繰り寄せることが出来る人間ほど魅力的なものはない。学力や肩書きには関係がないと思う。

自我を確立し、自己の未来設計を持てば当然自分の生き方に責任が伴い、その設計にしたがってたくましい行動力が生まれ、バイタリティのある人になり、さらには仕事の出来る人ひいてはスペシャリストという評価を受け、年輪を刻み人を使う立場になればオリジナリティを持ち、第一級の存在感のある人になるであろう。お互いにそのような人になるよう心掛けたいものである。

次に水産人としてどう対応するか。どこの漁協・漁連等の系統団体、行政および研究機関であれ、こうあってほしいと将来に対する願望がなければウソであろう。特に今日のように、200海里の設定による漁場や資源の制約や減少、魚価の低迷、資材や燃油の高騰等漁家経営にとって悪い条件下にあっては将来性のあるビジョンが切に要求されるであろう。

この漁業の未来を設計するには社会・経済や技術など科学的分野はもちろんであるが、そのみでは律しきれない自然条件や生物自体の特性を充分踏まえて、あらゆる角度から総合的に検討されるべきであろう。特に漁業生産を増大させるための対策では、その投資効果が一朝一夕に生れるものでなく、ある程度の年数を経て期待されることが多いことや、また、人間社会の限らない競争の原理や不法な漁獲が持ち込まれる漁業にあっては、規則や申し合せ等の遵守など漁業者自身の自覚の下に、この未来設計の実現に向けて辛抱強いバックアップがあって始めて設計した通りの計画が達成され、次代の漁業後継者に胸を張ってバトンタッチすることが出来るだろう。

われわれは、この百年の計を実現させるために、産、学、官の能力を結集し、バランスのとれた水産のバイブルである日本海の未来設計図を作ろうではありませんか。

新年を迎えるに当って所信の一端を述べてご挨拶いたします。

(しおかわ つかさ 京都府立海洋センター所長)

## 関 陽

今年一年、皆様方に有意義で実りの多い年でありますように心から、お祈り致します。

2001年まで、あと16年、遠く未来的に考えられていた21世紀が手に届くところまでできた感があり、今年はその区切りの年であり、又幕明けの年になることでしょう。

つい、この間まで夢物語であったようなことがらが目まぐるしく次々と実現され、“人間がより人間らしく”生きていくための新技術が急速に進展しつつあります。

一方、低経済成長の中で、確実に到来する高齢化社会・高度情報化社会への対応、又、産業経済の活性化等々幾多の課題が山積されており、水産界にとっても今年は長期展望に立っての考察が求められる年であると思いません。

本県の各試験研究機関にとって昨年はバイオテクノロジーへの対応等を巡って、永年の試・研体制の見直しを迫られ、今年には新しい技術との接点を見出すことが求められることになりそうです。

ここ、但馬海域では、依然として漁船漁業を主体とせざるを得ず、その大半が経営不振の度を増しつつあると云う情勢にあり、水産界も画期的な新技術時代を迎える中で、在来型漁業の将来像についての模索が続けられています。

極めて微力な当試験研究室にあって、今後皆様方のより一層の御支援方をお願いして御挨拶と致します。

(せき あきら 兵庫県但馬水産事務所試験研究室長)

## 大 谷 丈 夫

1990年大和堆に突如として、沖合漁船漁業の前進基地としての「人工魚島」が出現し、その竣工式が「水産未来都市境港」に於て挙行されようとしている。

21世紀の新漁業時代に先きがけて創られた、この「人工魚島」は

- ① 沖合漁業資源の安定化
- ② 新営漁方式による水産資源の合理的管理・利用
- ③ 食糧供給基地としての基盤安定化
- ④ 先端技術の導入・活用を軸とした、資源総合管理

のサブセンター

等を目途に「水産未来都市境港」の一環として整備されたものである。

その機能をもう少し具体的にみると、

- 1) 漁海況予測等諸データの海上サブセンター
- 2) 沖合で操業する漁船の休けい、補給
- 3) 安定した大規模な海洋牧場
- 4) 給餌も兼ねた多獲性魚の大量処理プラント

などである。

一方、会場内に設けられた「情報室」のスクリーンには、遙か彼方の「人工魚島」での集魚状況、獲り揚げ、処理加工等の一連の様子が写し出され、参列者の目を楽ませている。

ところでこの会場は広々とした水産公園に囲まれた「資源総合管理センター」で、生産から流通・加工全般の情報が居ながらにして解る「情報管理棟」、資源管理の前提となる「研究開発棟」、少し離れて青木のレストランを狭んで消費者とのふれ合いプラザなどなどからなる、将しく「水産未来都市」にふさわしい夢の殿堂である。

その時尿意を催し、ふと目が醒めた。残念なことに研究開発棟で働く人の顔が思い出せない。

1985年 初頭の夢。

(おおたに たけお 鳥取県水産試験場長)

佐竹 嘉泰

明けまして、おめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。

昨年は、春先に異常低温が打続き、このことが後々までも尾をひいて、沿岸漁業の漁獲は大きく減退するところとなり、一方、景気の回復基調とは裏腹に、魚価は低迷し、加えて為替レートは円安に動いて重油の値上りを誘発し、漁業経営は揺れに揺れた年でした。

年が明けて、これらの悪材料が一掃されると良いのだが、どこを見ても好材料は見当たらない。

60年度の国の予算をみても59年度のマイナスシーリングのあおりを受けて、表現こそ概算要求基準と変わったものの、前年以上に厳しい財政環境にあるといえよう。

このように四面楚歌ともいえる状況の中で、古い諺は、“嵐の時は背をかがめ、その過ぎるのを待て”と教えているが、果してそれだけで良いのだろうか。現在の水産業に見られる混乱は、その嵐を冷静に受け止め、その状況を分析し、そこに新しい戦略を打立てる現実的な知恵の欠如にありはしないだろうか。

試験研究機関のあり方についても同じ事で、業界の期待感が高まる一方で、予算はこれに反比例するが如き悪循環の中で、よりよい実効を揚げるためには、横の連けいというのか、情報交換をより密接にし、各県がそれぞれ分担を果たし、日水研がその頂点に立つといった所謂ピラミッド型の研究体制の推進がより必要になって来るのではなかろうか。

日水研の強力なリーダーシップと各県研究者の奮起が望まれるところである。

正月放談よろしくチョッピリ成人振った感じになりましたが、健康で楽しく研究に精励できる年でありたいと念じます。

(さたけ よしやす 鳥取県栽培漁業試験場長)

兒島 俊平

新年おめでとうございます。

新春の所感2題

1つは、日本海をとりまく漁業環境が急速に悪化しています。これは日本海漁業の主導権が韓国漁民に移り、攻守の所をかえたことに起因していると思います。

日韓漁業協定にもとづいて韓国漁船群が本土沿岸の好漁場に殺到するのは当然の理であり、また漁業の本質は我々の先輩が実証したとおり略奪漁業にあることには変わりはありません。略奪漁業の歴史を繰り返し、両国の漁民がお互いに自分の首を締めあい、いがみあいにならぬよう、研究者も智慧を絞る時期にあると思います。

他の1つは、我々は漁船漁業研究に力を傾注するあまり、肝心の漁獲物利用の研究を軽視してきたきらいがあります。これからの漁業において最も重要なことは、漁獲物をいかに商品化し需要を高めるか、地場産業を育成するためにも利用加工研究の強化・施設の充実が必要で



あると考えております。

(こじま しゅんべい 島根県水産試験場長)

### 山崎 繁

謹賀新年

昨年は栽培漁業にとって全く苦難の年でした。冬春期は異常低温、夏期は異常高温という10年周期ともいわれる異常気象に遭遇したからです。春期まずワムシの増殖不良に始まり、マダイの産卵期の遅れと成長不良、初夏にはアワビの脱落、盛夏にはヒラメの白点病によるへい死等、人間が管理する栽培漁業もまた気象に弱い第一次産業であるということをもざまざと思い知らされました。

種苗の大量生産研究という栽培にとっての主題も、その生産が安定期に入って相当に進んだようですけれど、まだまだ息の長い仕事です。そして、将来に向けて多くの可能性を持ちながらもあまりに問題があり過ぎるというのがいつわらない実感です。先端技術としてのバイオテクノロジーの華やかな展開も、まだセンターに降りてくるには人と施設の問題が解決されなければならないし、目下は栽培漁業の基本計画の年次生産目標を完遂することこそ急務でしょう。

「今年こそは」「今年こそは」で3年過ぎました。そして再度種苗生産という敵を迎え討つ準備を終り、今は春のくるのを待つだけです。

(やまざき しげる 島根県栽培漁業センター所長)

### 大塚 雄二

明けまして、おめでとうございませう。とは言うものの「めでたさも中の下ぐらいか、おらが春」。

これは、“打ち合せ”“書き直し”“差しかえ”を繰り返した結果、頁数と事業項目だけはやたらに増えて部厚くなり、予算額は反比例して小さくなっていく、60年度予算要求書を前にしての私の本音です。

しかし、悲観している理ではありません。

60年度のプロジェクトも、やり方次第では相当に面白そうだし、うまくいけば来年の春は「中の上」ぐらいにはしたいものと、希望に燃えています。

ところで、去年もまた魅力的なカタカナ言葉やテクニカル・タームが我々の世界にも大流行しました。例えば、「バイテク」「ジーンバンク」「バイテレ」「リモセン」「サイドスキャン」「パソコンにフロッピーディスクにデータベース」「マリノホリスにマリノベーション」etc。

カタカナではありませんが、「資源管理技術」と言うのも、昔、古典的資源学を少し習っただけの私には、驚きに似た新鮮さを感じます。

一方、嫌なカタカナ言葉も沢山ありました。

例えば、「サン・セット」「マイナスシーリング」「スクラップアンドビルト」etc。

この嫌な言葉は、私達の所にもすっかり定着してしまって、厄介者になっていますが、魅力的な方は、言葉だけが素通りしてしまいました。

今年こそは、魅力的な方も一つか二つぐらいは、私達の所にも、お留りいただきたいものと願っています。

(おおつか ゆうじ 山口県外海水産試験場長)

### 大内 俊彦

明けましておめでとうございます。

年頭にあたり、皆様方のご多幸をお祈りし、本年もよろしくご指導の程をお願い申し上げます。

人間の意志による制御機構を有しない巨大エネルギーに支えられ、それ故に不安定であることを宿命とされる一次産業も、安定的増産に向けて絶え間なき努力がなされている。全智全能でない人間の行うことは、常に人間中心であり、思いも掛けない“シッペ返し”を受けることもある。それでも、なお、試行錯誤を繰り返す。その努力は人間が“神”になるか、滅亡するまで続くであろう。

昨年の4月に着任以来、お陰さまで種苗生産についても一応順調に経過し、年末・年始は穏やかな天候に恵まれた。つい、気を許して酩酊し、ペンを執りました。

正に平和である。

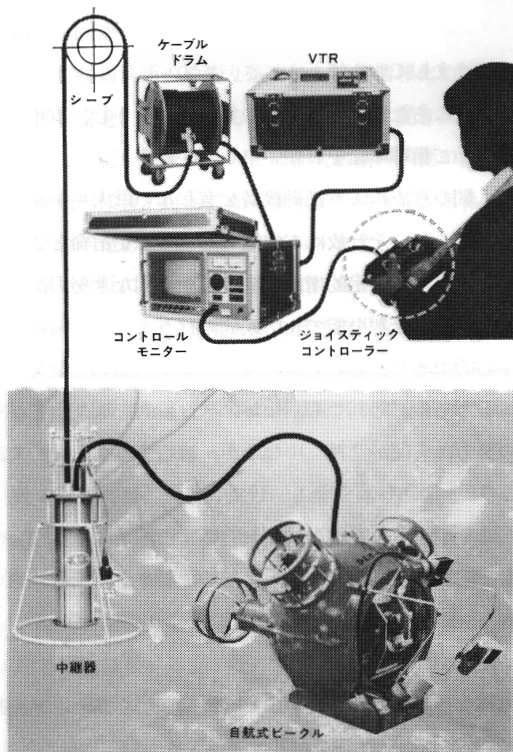
(おおうち としひこ 山口県外海栽培漁業センター所長)

## 自航式水中探査カラーテレビカメラ装置の紹介

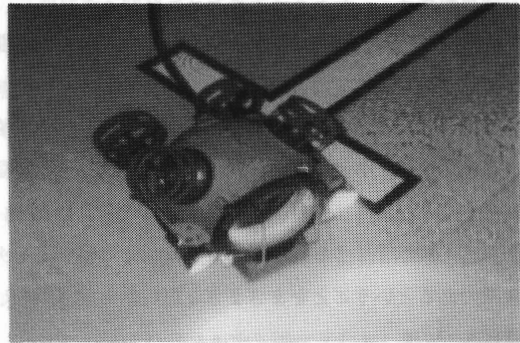
代田 昭彦

本装置（DLT-300C型）は科学技術庁の科学技術研究振興調整費による「海洋生物資源の生産能力と海洋環境に関する研究」第Ⅱ期（昭和59～60年度）初年度の購入備品で、海洋科学技術センターと㈱キュー・アイが共同開発した製品である。

装置は図に示すように、自航式ビークル、中継器、コントロールモニター、ジョイスティックコントローラー、200mケーブル（φ16mm、許容張力400kg）、VTR、トランス（AC100VからAC220Vへ変換）からなり、船上から水中の様相を連続的に観測、記録する無人機で、調査船を固定し、水深150m以浅の海底に中継器を設置し、これに連結した本体のビークルを船上からジョイスティックで自由に操作できるという極めて簡単なものである。



自航式水中探査カラーテレビカメラ装置



テスト中の自航式ビークル

本体の自航式ビークルは直径43cm、方位計、深度計、バランスウェイト、400W 2基の光源用ハロゲンランプ、スラスター4機（本体を前後進、左右、上下及び旋回させる）をもち、中継器から25mのテザー（中性浮力）ケーブルで連結しているので、本体は海底を基盤として直径50mの半円球範囲内を隈なく観察することができる。撮影は本体内蔵の自動絞レンズ8mm、F1.4、焦点調整範囲0～∞の高感度テレビカメラ（鉛直移動±45°）で広視野の撮影ができ、最低の被写体照度は100Luxまで可能で解像度260本以上の11型モニターテレビで鮮明に映像、記録される。

水産研究の発展を阻害する最大の要因の一つは水中の目視ができないことである。本機はリモコン操作を修得し、波浪の穏やかな日を選べば極めて手軽に「水中の眼」として役立ち、誰もが利用可能である。本機と同型の実例は既にNHKの南極の氷下生物、摩周湖の底生生物、奥琵琶湖の古代史跡探索、沖縄の珊瑚礁生物の昼夜観察等で周知のもので、すばらしい威力を示している。

従って、海底の物理的性状、底生生物、海藻、人工礁、魚介類の昼夜の行動生態の把握は勿論、懸濁物質、プランクトン、河口域のフロントの様相、躍層、潮目と生物の集積、更には放流種苗の追跡観察等、従来の調査研究の不備を補う成果を発揮することができよう。

本機が当水研に到着した昭和60年1月14日の2日後、

新潟市営の温水プールで第1回の操作テストが行われ、県の水産試験場や水族館員を含む約20名の参加を得た。本体のビークル（水中重量0～1kg）が潜水時にスラストの作動で泡立ちと波浪を伴う他は写真のように気泡の発生や回転音は全くなく静かな游泳探索機であることを確認した。また、物体の色調、観察精度はアワビの貝殻で行ったが呼水孔、色調とも明瞭で、プールの底のタイル間隙の状態もよく把握できる精度をもつことがわかった。本装置の重量についてはビークル本体が47kg、

モニターテレビが25kg、中継器は29kgでそれぞれ1～2名で移動が可能であるが、最も重い200mケーブル付ドラムは120kgでキャスターが付いているが小型トラックへの積み込みには3～4名は必要である。

なお、第2回操作テストは5月中旬に柏崎市沖の海中で当水研所属調査船「みずほ丸」を用いて実施予定である。本装置が浅海開発、資源生態調査研究に有効に利用され活躍することを期待する。

（しろた あきひこ 日水研浅海開発部長）

昭和59年7—12月 日水研主催会議一覽

期 日	会 議 名	開 催 地	機関数
7月11～12日	マリンランディング計画イタヤガイ研究計画検討会議	松 江 市	8
9月26～27日	昭和59年度第1回浮魚類長期漁況海況予報並びに漁業資源評価会議	新 潟 市	15
9月27～28日	昭和59年度第2回日本海スルメイカ長期漁況海況予報会議並びに日本海いか資源評価検討会議	新 潟 市	22
10月23～24日	日本海ブロック重要貝類毒化対策事業中間検討会	石川県山中町	15
11月28日	海洋生物資源の生産能力と海洋環境に関する研究 昭和59年度第1回北陸沿岸地域研究検討委員会	新 潟 市	16
12月4～5日	マリンランディング計画イタヤガイ・アカガイ現地検討会	広 島 市	10
12月13日	日本海ブロック人工魚礁研究会	新 潟 市	23

《所 内 談 話 会》

異体類稚仔魚の輸送と着底 南 卓志

《研究業務短信》

昭和59年7月27日

若狭湾のクロロフィルについて 永原 正信  
1984年の日本海における“異常低水温”について 長沼 光亮

10・1 日本水産学会 仙台市. 南枝官（～2）.  
10・1 海域総合開発調査年次別検討会 高知市. 服部 企連室長（～6）.

昭和59年8月31日

貝毒調査について 服部 茂昌  
カニ類の種苗と環境 中西 孝  
日本海のサケ資源の現状 高橋 善彌

10・2 底魚生態群集調査（みずほ丸乗船） 佐渡海峡 長谷川, 梨田技官（～5）.  
10・6 水産海洋研究会 京都市. 長沼光, 南, 長田技官（～8）.

昭和59年9月19日

最近の海洋観測機器の展望 中井 俊介(東大海洋研)  
日本海の矢虫 寺崎 誠( " " )  
南極航海記 寺崎 誠( " " )

10・11 富山県海洋総合利用研究会議 水産部会 富山市. 藤谷所長（～13）.  
10・11 MRP（海牧）中央検討会 茨城県筑波郡谷田部町. 田中邦室長, 加藤, 輿石技官（～13）.

昭和59年10月5日

体長組成データと年令分析 加藤 史彦・赤嶺 達郎

10・11 放射能研究打合せ 東京都. 笠原技官（～13）.  
10・12 低次生物生産調査（みずほ丸乗船） 佐渡西方

- 水域. 木谷室長, 広田, 長田技官(～16).
- 10・14 所長懇談会及び所長会議 湯沢町, 東京都. 藤谷所長(～19).
- 10・14 海域総合開発検討会 秋田市. 田中實室長, 加藤技官(～15).
- 10・14 59年度電子計算機プログラミング研修 茨城県筑波郡谷田部町. 赤嶺技官(～20).
- 10・17 プリ資源連絡会議 妙高高原町. 渡辺室長(～20).
- 10・22 するめいか稚仔調査(みずほ丸乗船) 九州西岸～東シナ海北部海域. 笠原, 南技官(～11/17).
- 10・23 重要貝類毒化対策事業中間検討会 石川県山中町. 服部企連室長(～25).
- 10・23 UJNR会議 三重県. 中西技官(～26).
- 10・23 国立エビ種苗生産・研究センター設立基本設計調査 マレーシア. 代田部長(～11/7).
- 10・29 西部ブロック場所長会議 京都市. 藤谷所長(～11/1).
- 10・29 放射能担当者会議 長崎市. 池原技官(～11/2).
- 10・30 水産庁試験研究所庶務部課長会議 清水市. 和田課長(～11/2).
- 10・30 人工礁魚探調査打合せ 静岡県戸田村. 田中實室長(～11/1).
- 10・30 漁業経営調査 岩船. 長谷川技官.
- 10・31 技会企連室長会議及び水研企連室長会議 東京都. 服部企連室長(～11/2).
- 11・4 若狭湾事業場宮津施設開所式 宮津市. 服部企連室長(～5).
- 11・5 農学情報機能部門研修 茨城県筑波郡谷田部町. 野口技官(～10).
- 11・6 海域総合年次別検討会 秋田市. 服部企連室長(～8).
- 11・6 北陸農政局統計協議会 金沢市. 渡辺室長(～8).
- 11・7 全場所長会議 東京都. 藤谷所長(～9).
- 11・7 アワビの増殖について漁業研修講師 青森県. 田中邦室長(～10).
- 11・13 ヒラメ種苗放流指導 米子市. 加藤技官(～18).
- 11・14 評価報告書等検討専門委員会 東京都. 藤谷所長(～15).
- 11・19 海洋生産力研究推進委員会 東京都. 服部企連室長(～20).
- 11・20 資源海洋部部長会議 東京都. 北野部長(～22).
- 11・28 GSK浮魚環境部会 塩釜市. 笠原, 長沼技官(～12/1).
- 11・28 近畿農政局統計協議会 京都市. 渡辺室長(～30).
- 11・30 海生研柏崎実証試験施設竣工式 柏崎市. 藤谷所長, 服部企連室長, 代田部長.
- 12・1 漁業公害の原因と対策研修会 鳥取市. 代田部長(～4).
- 12・3 クルマエビ放流効果(全国沿岸漁業振興会)報告会 山形市. 高橋室長(～4).
- 12・4 イタヤガイ現地検討会 広島市. 田中邦室長, 赤嶺技官(～5).
- 12・4 底魚生態群集調査(みずほ丸乗船) 佐渡海峡. 長谷川, 梨田技官(～6).
- 12・4 人工礁検討会 熊本市. 田中實室長(～7).
- 12・4 GSK底魚会議 八戸市. 南技官(～6).
- 12・4 しんかい2000報告会 東京都. 伊藤技官(～5).
- 12・5 国際協力事業団(マレーシアエビ調査団)打合せ中間報告会 東京都. 代田部長(～6).
- 12・7 増養殖関係部部長会議 東京都. 代田部長(～8).
- 12・10 生産力試料分析 京都市. 檜山技官(～13).
- 12・10 公害研修 茨城県筑波郡谷田部町. 野口技官(～15).
- 12・11 海洋調査連絡会 舞鶴市. 長沼光技官(～14).
- 12・17 マダイ放流技術報告検討会 金沢市. 田中邦室長, 赤嶺技官(～19).
- 12・17 ハタハタ研究打合せ 男鹿市. 田中實室長, 南技官(～19).
- 12・18 科学魚探記録解析業務 東京都. 長谷川技官(～21).
- 12・18 関根浜及びその周辺地域漁業振興調査委員会 青森市. 藤谷所長(～21).